

## 『鳥と獣と花』の謎に迫る

佐藤 治夫

### Solving an enigma of the “arguments” in *Birds, Beasts and Flowers*

Haruo Sato

#### Abstract

D.H. Lawrence's arguments (or notes) to the collection of his poems, *Birds, Beasts and Flowers*, have long attracted researchers' attention because of its enigmatic contents, suggestive of pagan contents in many cases. The present study focuses on the order of the nine arguments and analyzed Lawrence's intentions for the perplexing and perhaps erotic descriptions of topics apparently non-related to the poems, maybe threatening blasphemy in some cases. The author came to believe that Lawrence at this late stage of his life—he dies seven years after the publication of the poems—showed discrepancy from orthodox Christian beliefs more obviously but equivocally. Therefore, *Birds, Beasts and Flowers* is indicative of Lawrencian conversion and spiritual independence on Christianity.

**Key words**: atheism, *Birds, beasts and flowers*, D.H. Lawrence, *Now the Day Is Over*, poetry.

#### はじめに

D.H. ロレンス (1885-1930) の詩集『鳥と獣と花』(1923) は、まず題名からして、私たちの予想を覆す奇妙な九つのグループに分けられており、かつ各々の詩群の前書きのような解題(本書ではこれらを、「その置かれた位置からして」解題と呼ぶ)のような、奇妙な文が添えられている。この「解題」が、ただ「解」説するためのものとは言えず、かえって謎を深める役割をしているのだ。本章では、解題の内容を追いながら、この謎ときに挑むことにする。

#### タイトルそのものは

本質的な謎に迫る前に、一風変わった詩集のタイトルについて調べてみよう。詩集の題名については、大変分かりやすいので、研究者は助かっている。英国民謡の収集家でもあったサビニ・ベアリング-グールド (Sabine Baring-Gould) 牧師 (1834-1924) が作詩し、ロレンスがこの詩集を出版する当時に人口に膾炙していたと思われる「さて一日が終わって (Now the Day is Over)」という、賛美歌様の優しく美しい歌の二番第3行目

Now the darkness gathers,	さて暗くなって
Stars begin to peep,	星が目を開けると
Birds, and beasts and flowers	鳥も獣も花も
Soon will be asleep.	すぐに眠るのだね

# Now the Day is Over

作詞 Sabine Baring-Gould  
作曲 Joseph Barnby

The musical score is written in treble and bass clefs with a key signature of two sharps (F# and C#) and a 4/4 time signature. It consists of four systems of music, each with a vocal line and a piano accompaniment line. The lyrics are printed below the vocal line.

**System 1:** *p* (piano). Measures 1-2. Lyrics: Now the day is o - ver, / Now the dar - kness gath - ers, / Je - sus, give the wea - ry / Thro' the long night watch - es.

**System 2:** Measures 3-4. Lyrics: Night is draw - ing nigh, / Stars be - gin to peep, / Calm and sweet re - pose, / May Thine an - gels spread

**System 3:** *f* (forte). Measures 5-6. Lyrics: Shad - ows of the eve - ning / Birds and beasts and flow - ers / With Thy ten - d' rest - ing, / Their white wings a - bove me,

**System 4:** *p* (piano). Measures 7-8. Lyrics: Steal a - cross the sky. / Soon will be sleep. / May our eye - lids close. / Watch - ing round my eyes.

<http://www.d-score.com/ar/A06061201.html>

から、この詩集の題名が取られているのは明白である。この題名だけからでも、私たち読者は、聖書の世界を想像してしまう。あまりオーソドックスに神様と付き合っていたとは言えないロレンスが、このようなタイトルを選んだこと自体が驚きである。タイトルを付けるに当たって、ロレンスがまったく独自に考えたタイトルかどうかは、今となってはうかがい知ることができないのだが、一見理解しやすいこのタイトルそのものが、次に論ずるメインの謎と、ある意味で繋がってゆくのではないだろうか。

### 詩集の構成の謎

『鳥と獣と花』の九つのグループに分けられた詩群について、その分類の仕方そのものにも、読者・研究者を問わず興味は尽きない。決してタイトルどおりの「鳥」と「獣」と「花」という順序ではなく、全体の構成は、以下のようになっている。

果物：柘榴，桃，無花果，花梨とナナカマドの実，葡萄，革命家，日の沈む国，平和

樹木：糸杉，無花果の木，巴旦杏，熱帯地方，南国の夜

花々：巴旦杏の花，紫のアネモネ，シシリアのヒヤシンス，ハイビスカスとサルビアの花

福音書の獣たち：マタイ伝，マルコ伝，ルカ伝，ヨハネ伝

地の獣たち：蚊，魚，蝙蝠，ヒトと蝙蝠

地を這うものたち：蛇，亀の子供，亀の甲羅，亀のファミリーコネクション，雄亀と雌亀，亀の愛技，亀の叫び

鳥たち：雄七面鳥，ハチドリ，ニューメキシコの鷺，青カケス

動物たち：驢馬，雄山羊，雌山羊，象，カンガルー，犬のビブルス，クーガー，赤い狼

精霊たち：ニューメキシコの男，タオスの秋，西に呼ばれる精霊，アメリカン・イーグル

(太字は、各詩群につけられた名称であり、果物から始まり精霊たち Ghosts で終わっている。句点が詩と詩のタイトルの切れ目を示している。)

勿論、この詩集をまとめるに当たり、ロレンスが独自の視点から、これまでに書きためた詩を、分類（と言えるかどうかは疑問である）というより無理を承知で「分別」した結果であり、詩群「果実」の中に、どう見ても分類できそうもない「革命家」という詩が入っていたりしても、問題ではない。そのことは、ロレンスにとって、この分類のほうが大事だったことをしめしているのであろう。むしろこの九つの詩群の小題が、

果物 樹木 花々 福音書の獣たち 地の獣たち 地を這うものたち 鳥たち 動物たち 精霊たち

という「順序」で並べられていることの方が、私たち読者に大きな謎を投げかけているのである。本稿で挑むのは、このように不可思議な構成になった理由を推論すること、さらにこの小題の直後に必ずついている、中の詩そのものよりも難解なことが多い、これも九つの解題（ロレンスは、一度もこれが何のことなのか解説はしていない）の「ような」文章を、なぜロレンスが必要だと考えたかという謎解きなのである。

## 解題に潜む手がかり

ロレンスのつけた、前書き/解題にも思える奇妙な文章と書いたが、読んでみないことには始まらないので、拙訳を以下に示そう。

### 『鳥と獣と花』解題集（日本語訳のみ）

#### 果物

「というのはだよ、果物というのはみな雌で、中に種が隠れているんだ。だから、皮が破れて種が出て、やっとその子宮を覗き込んで、種の秘密が見えることになるのさ。そういうわけでアラブの人には石榴が愛の果実ということになっていて、無花果はこの長きにわたり女性のサケ目の代名詞ということなのだ。「知ったこっちゃないぞ（注：慣用句←“I don't care a fig for it”）」に、なんで無花果なんだ？エデンの園の果実はイブの果物だった。イブに果物は帰属していたし、それをイブは、男に差し出したんだ。智恵の実でさえイブの果物、つまり女の果物なのだ。でも、命の実だけは、龍が護っているから、女はそれを男に与えるわけには……」

「男が長い間卒中にもならず、飲めるだけ飲んで、従僕の助けなしに帰宅できるなら、何の咎もないのだ。」

#### 樹木

「聞くなりく、イタリアの糸杉に病気が流行り、樹が死滅している由。今や失われた過去の秘密の影さえも、この世から消えつつあるのだ。」

「エムペドクレス曰く、太陽が大きく広がり、昼夜の区別が分明ならざりし頃、樹木は大地から最初に生えた生き物であると。ゆえに樹木の体内の構成は、雑然としており、男性と女性の要素を備えている。樹木は大地に蓄えられた熱により成長するのだから、胎児が子宮に属することく、樹木は大地の一部と考えられる。果実というのは、植物に内在する、水と火の要素から分泌されるものなのだ。」

#### 花々

「それから、昔々のことだが、アーモンドは復活の象徴だったんだ。でも教えてくれないか。どうしてアーモンドが復活の象徴なのかを。」

君は見たことがないのかな。南地中海の冬でも強い日差しの中で、一月や二月にアーモンドの樹が、栄光の雲につつまれて再生するのを。

おお、そうだね。またあれを見たいねえ。

でもこれが秘中の秘というわけではないのさ。体の中の脊柱最後の骨は、アーモンド・ボーンと呼ばれたことを知っているかい？これは体が生じる種になる骨なのだから、お墓の中からも新しい体が生えてくることができるのさ。丁度一月にアーモンドの花が咲くようにね。

いや、それは全く知らなかった。」

「ああ、ペルセフォネーよ。冥界から或る男の魂を私の元に持ち帰りたまえ！」

エムペドクレス曰く、「ええい、この悪党めら。豆に手を出すな」

ある人によると、豆が投票に使われていたから、豆は政治だったのだ。でも、豆は食の禁忌だったとする人もいる。また、こう言う人もいる。豆は男性器を示す古代の象徴であった、と。豆の莢はえんどう豆の莢より旧いのだから。」

「でも血は赤い。だから血は生命なのだ。赤は、国王たちの色でもあった。国王たち。はるかな昔の国王たちは、顔を朱に彩っていて、それ故に神に近づいたのだった。」

### 福音書の獣たち

「ああ、おねがいだ。黙示録の獣たちを、元のように天の四隅に戻しておくれ。

星を散りばめたその翼で、獣たちは夜を治めるのだ。だから夜の空を見上げる人間は、四度の生を生きるのだし、夜を眠って過ごす時には、四種類の眠りを味わえるのだ——獅子の眠り、雄牛の眠り、人間の眠り、鷲の眠りを。眠りから醒めると、獅子が目を覚まして昼となる。すると天の四隅から四つの風が起こり、人の命が変わるのだ。しかしだよ、天がカラだと、つまりこの四匹の獣、四つの自然、四つの風、天の四つの隅が、もぬけの殻になっていると、人間は獅子や雄牛の眠りは味わえず、明るい目をした鷲の眠りから目覚めることもなくなるのだよ。」

### 地の獣たち

「でも、魚というのは、体内に火を持っているので、冷やすために水にもぐっているのだ。」

「闇を好む生き物たちには、昼間の明るさは酷い苦痛なのだ。でもランプや蠟燭の明かりを恐れたりはしない。かえって近寄って、その感覚を確かめているようだ。まるで《何でこうなるのだろう？ああ、わかった太陽は、炎やランプの明かりのように単に燃えているだけではないということなのだね。》とでも言いたげに。太陽はその光線で、夜の生き物たちを傷つけるのだが、ランプや蠟燭の炎は傷つけないのだ。たからこそ、太陽は輝くことで生き続け、消えることがある炎とは似ていないのだ。」

### 地を這うものたち

「ホメーロースが、神々の争いも人間の戦もなくなって欲しいと言ったのは誤りだった。ホメーロースは、自分がこの世の破壊を祈っているとは分からなかったのだろう。もしその願いが聴き届けられていたら、全ての物が消えてしまうだろう。拮抗する二者の緊張があるから、全ての物が存在しているのだから。」

「というのは、下降してゆく火が、地の黒い息と混じることがあると、蛇がするすると現れて

くる。蛇はしかし、湿って冷たいし、体内の太陽は地の湿り気により定まらず、結局立ち上がることはない。こういうことから、蛇は口の中に毒を持つのである。体内の太陽は少しでも起き上がり足で移動させたいと願っても、湿った地が、くねくねと逆らう蛇を地に縛り付け、腹で地を這わねばならないのだ。亀は賢くも、体内の地の部分を体に巻きつけてしまい、自分の足を見つけたのだった。ということで、亀が自分の足で立ち上がった最初の生き物となり、自らの家の丸屋根を、自分の天にできたのだ。それゆえに、亀は知りつくされていて、この世の基礎となっているのだ。」

### 鳥たち

「鳥は空の命なのだから、鳥が飛ぶときには、天の考え方を示してくれる。鷺は、他の鳥が及ばぬほどに、太陽に最も近く飛ぶ。

だから鷺は太陽の命を、太陽の力を、翼に込めて降りてくるのだ。鷺が輪を描くのを見ると、人間は太陽の高揚感を身に籠めるのだ。とはいえ、太陽に向かい飛ぶ生き物は、口を血で染めねばならない。太陽は永遠に渴き、ぱっと飛び散る血しぶきに飢えている。

鳥は鳴き声でどの鳥か分かるものだ。大きな鳥は啼くが、歌わない。鷺は、太陽が高くなると金切り声をあげるし、孔雀は明け方に啼く。大鴉は夜啼くが、夜鷺は夜に歌う。鳥はみな独自の声をしていて、それぞれに別のことを意味するのだ。」

### 動物たち

「そうなんだ。牛や獅子に手ができて、絵を書いたりして、人間と同じように芸術作品を作るなら、馬は絵の中の神々は馬の恰好を、牛の神々は牛の。そして自分の姿は、その動物の中の様々な種類に合わせて描くことだろう。」

「聞いた話だが、犬を誰かが叩いているところに出くわして、彼が言ったそう。こら、叩きな！声を聴いて分かったが、この犬には私の友達の魂がいるのだぞ。」

「豚は泥まみれ、家禽は砂まみれで、体を洗う。」

### 精霊たち

「あたかも、犬が臭いを頼りに、獣の足の抜けた毛や、柔らかい草に残る足の臭いを追ひ、人間には見えない道を進むように、人間の魂も、死者の通った跡を辿り、非常な距離を歩くのだ。この長旅は、眠りと忘却に続く。死者は時に振りかえり、立ち止まる。今になって失った全てを理解するからだ。後から生者が追いつき、苦痛に満ちた出会いの挨拶となるし、二度目の別れは、死ぬほどに辛く。ああ、ああ、死者は心乱れて。死んだからとて、過ちが全て帳消しにはならぬ。」

いかがであろう。読者もパニックを起こしそうになるのではなかろうか。個別の文章の断片について、何となく「わかりそう」な気がするだけで、実際には全体像が見えないのである。

## 解題のヒエラルキー

ロレンスの描く、この詩群のサブタイトルを、単に何度読んでも閃くような思いつきが得られない。しかし、やはり何らかの順序があるのではないかという仮説の元に、これを出現逆順で上下方向に並べ替えて

精霊たち  
動物たち  
鳥たち  
地を這うものたち  
地の獣たち  
福音書の獣たち  
花々  
樹木  
果物

みると、果実を最下層とする何らかのヒエラルキーが見えてくる。逆順にするのは、精霊から上方向へのヒエラルキーで、果物が頂点となるものは考えにくいからである。このヒエラルキー仮説を解明することが、謎解きの出発点となるであろう。

## ロレンスの世界観の基本は雌雄

ロレンスの書いた書簡などの研究により判明したことだが、ロレンスは古代文明に独得の思い入れがあり、名著バーネット *Early Greek Philosophy* を何度も借りてまで読んでいる。哲学者バートランド・ラッセル卿と親交のあったロレンスは、1915年7月13日のラッセル宛の手紙の中で、

「私は自分の哲学がキリスト教に傾きすぎていたのが間違いだった。初期のギリシア人たちが私の魂を清明なものにしてくれた。私は神について思っていたことをすべて捨てなければならない。」

と述べているくらい、精神的・宗教的ショックを隠そうともししていない。十九世紀末から二十世紀初頭を生きたロレンスも、当時ヨーロッパ文化圏で広く進行していた、キリストとしての神との離別をしたのであろうか。ロレンスは、一度もキリスト教徒としての立場を表明してはいないが、その作物にはキリスト教での神はいない。キリストの死と再生を描く作品も「死んだ男」“The Man Who Died”などとタイトルをつけるロレンスであったから、「自分の」宗教観を作り上げていったのであろう。ただそれは、キリスト教との徹底的な離別ではなく、心の中でのゆっくりとした神観の変質ということであった。

変質してゆくロレンスの世界観の基部をなしているのは、この「果物」の記述に見られる、生物学的雌雄だけでなく、古代ギリシア哲学に基く哲学的な思弁の上での雌雄の概念である。この世を雌雄の概念でまとめるという、一見単純で明快な仕分けの「初期のギリシア人」の哲学的思弁に傾倒していたロレンスを書いたと考えれば、「……果物というのはみな雌で、中に種が隠れているんだ」という、先頭の記述の意味が、うっすらと理解できる。全ての存在物の出発点は「愛」つまり調和

的結合であるとする、古代ギリシア人の考えに共感したロレンスが、『鳥と獣と花』で、独自の世界観を示そうとして、世界のファースト・ムーバーが、神ではなくて、ぱっくりと割れて中の種を見せる雌だ、としているのではないだろうか。それゆえ、女は男に人間としての知恵は渡せるが、命はドラゴンが守っているから、女が男に渡せる物ではないというのであろう。

注意せねばならないのは、古代ギリシア哲学での「種」とは、何かが生じる「元」をさすのであり、現在の生物学で教える、生物の生まれてくる DNA を引き継ぐ主体としての卵子、種子のことでない。ロレンスの描く世界では、男・雄と女・雌（ロレンスの場合は雌と雄の順序であろうか）が、すべての始まりであると説いている。これは、ロレンス独特の思想ではなく、古代ギリシア哲学からの影響も入っている。

この「果物」は、ギリシアの哲人のような書き出しではあるが、ザクロを愛の果実とするアラブ人や、エデンの園でのリンゴが出てきたりと、全く古代ギリシアの哲学者が書くはずがない内容となっているから、『初期ギリシア哲学』からの直接の影響・引用とは考えにくい。古代ギリシアの哲学大系で論ぜられる場合の雌雄は、現代生物学での雌雄とは、まったく別の次元での、概念上の雌雄である。この世を作るのは、現代では元素番号表に出ているものだけであるが、古代ギリシア哲学では、二元論から五元論までである。

### 世界観の頂点には何が

この果実からスタートした、生命に満ち溢れた世界の頂点には、ロレンスがタイトルをつけたように「精霊たち(ghosts)」がいるのだろうか。解題からすると、どうやら精霊ではなく、本物のゴーストのようである。北米大陸に滞在中に書かれたこの「精霊たち」に収められた詩群は、「精霊は西に呼ばれ (Spirits Summoned West)」に見られるように、死んで英国に葬られた後も、ロレンスにとっては女であり続ける存在、キリストという神が存在しない世界での雌としての属性を備え、「果物」で暗示されている、復活を果たす人として描かれている。

「精霊たち」に至るまでの、このヒエラルキーの途中も、キリスト教とは内容が無縁とあって良い。一番近そうな「福音書の獣たち」でも、聖マタイ以外は、動物になっている。ロレンスの理知的な世界観は、キリスト教との乖離があるものの、構造的な部分はあまり変わらず、やはり世には四隅があり、生き物には雌雄があるのだ。「精霊たち」のなかで、最も重要なのは、「精霊は西に呼ばれ (Spirits Summoned West)」に見られる、女性の死者を死者として扱わずに、生きている者として直接話しかける生死の超越であろう。ロレンスにとって、この超越の先に残されるのは、このヒエラルキーの頂点が、物質としての属性を離れた存在になり、かつ女性（雌）としての属性を備えた存在しかない。ということは「果実」の雌状態に「還元」されているということになるのは明らかであろう。この論の出発点の仮定は、この詩群が何がしかのヒエラルキーを持つということであったが、実はヒエラルキーに見えただけで、先頭の精霊まで上り詰めると、また果実の状態にもどるという、輪廻転生にたどりつくのではないだろうか。

### Bibliography

Lawrence, D.H. *The Complete Poems of D.H. Lawrence*. Ed. Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts. New York: Viking, 1971.



『鳥と獣と花』の謎に迫る

Burnett, John. *Early Greek Philosophy*, Elibron Classics, 2005. (a reproduction of 1920 edition)

Burwell, R.M. "A checklist of Lawrence's reading." In : Sagar, Keith ed. *A D.H. Lawrence Handbook*, pp.59-125, Barnes and Noble Books, New York, 1982